

Quarterly Journal of Seismology

Vol. 50

報 時 震 驗

第 50 卷

昭和62年 3 月

氣 象 庁

Published by the Japan Meteorological Agency
Tokyo

March 1987

験震時報 第31巻～第50巻 総目次

第31巻

第1号

岡本 晟：亀山の地震記象からみた地震活動域について	1
栗原幸一・桧原久義：十勝岳における火山性地震について（第1報）	9
石黒長蔵：浦河の地震記象からみた北海道周辺の地震活動について	15
持永孝典：温泉岳の地震記象からみた地震活動域について	25

第2号

古寺義光：旭川の地震記象からみた地震活動域	35
大西功一：釧路の観測資料からみた地震活動について	43
山本復太郎・野田喜一郎：八戸の資料からみた初動の押し引き分布とP波走時について	49
早坂慶一・菅原吉夫：酒田の地震記象からみた地震活動域について	57

第3, 4号

安井 豊：南四国の有感地震の一調査——南四国における一点観測による震源決定の精度——	67
小野崎誠一：一倍強震計の記録方式改造	81
毛利文郎：64型震度計	85
渡部 貢：微動の消長と地震活動	89
渡部 貢：P波走時およびその偏りから推定される東北日本における地殻構造の一断面	95
中居平文：宮古の地震記象からみた地震活動域と地下構造について	101
岩戸次郎・吉田 進・三沢一夫：根室の地震記象からみた北海道周辺の地震活動域について	109

第32巻

第1号

斎藤 寛：白河の地震記象からみた地震活動域について	1
佐田喜雄・加藤公司：帯広の観測資料からみた北海道周辺の地震活動域について	9
宮内民人：長野の地震記象型および験測結果からみた地震活動域	17

第2号

田中康裕：噴煙現象の統計（第1報）	27
釧路地方気象台：昭和40年8月31日弟子屈付近に起こった地震について	51
吉岡虎雄：福井の観測資料からみた地震活動調査	63

第3, 4号

田中康裕：噴煙現象の統計（第2報）（爆発噴煙）	79
田中康裕：噴煙現象の統計（第3報）	91
長宗留男・横山泰孝・須賀盛典：旭川および根室で観測される小地震・検知能力・マグニチュード(m)の決定	103
清水邦夫：桜島火山の爆発に伴う群発微小地震について	117
浜松音蔵：地震災害の場・地震の規模と災害量——地震災害の統計的研究(1)——	129

浜名 宏：マグニチュードを求める式の係数 α について	141
橋本公司：秋田市の震度分布について	145

第 33 卷

第 1 卷

村山信彦：1956年3月30日のベズイミヤン火山大爆発による気圧振動の伝搬と火山灰の移動	1
村山信彦：近年日本の火山爆発によって生じた微気圧振動	13
吉留道哉：鹿児島港の平均潮位差から求めた地殻変動と桜島噴火との関連について	19
橋場善也・嶺脇 実・本間英作・星野 祖・高谷喜一：北海道渡島支庁八雲町遊楽部川支流 トワルベツ川流域字富咲沢地帯の地すべり調査報告	25
函館海洋気象台・森 測候所：恵山火山基礎調査報告	27
釧路地方気象台：昭和42年11月4日の弟子屈付近地震現地調査報告	31
本多良治：北海道駒ヶ岳火山の火山活動について	37

第 2, 3, 4 号

泉原安吉・田中 誠：広尾の地震記象からみた北海道付近の地震活動域について	45
嶺脇 実：函館の地震記象からみた北海道周辺の地震活動域について	49
渡辺偉夫・八木恒介・瀬良義郎：仙台の地震観測から得られた東北地方周辺の 地震活動域と地殻構造	57
朝倉克抓・多田匡臣・加藤和夫：盛岡の観測資料からみた地震活動域について	75
橋本公司：秋田の地震記象からみた地震活動域について	91
春日井哲吾・岡崎信夫・村上日出男：福島の観測資料からみた地震活動域について	101
鈴木 健：山形の地震記象からみた地震活動域について	123
伊東重敬：新潟の地震記象からみた地震活動域について	135
酒井正吉：水戸の地震記象からみた地震活動域について	145

第 34 卷

第 1, 2, 3 号

山本明雄・高橋仁造：甲府における初動方向からみた地震の活動域について	1
山本一雄・窪田朝次郎・瀬下伸二：相川の地震記象からみた地震活動域について	9
宇都宮地方気象台：宇都宮の地震観測資料からみた関東地方周辺の地震活動域について	17
郡山不二男・早川国夫：三島の観測資料から見た地震活動域調査	27
飯田測候所：飯田の地震記象からみた地震活動域について	37
音石真次郎・中野 稔・今井利長：高山の記象からみた地震活動域について	45
池田伊太郎・河崎紀夫：富山の地震記象からみた地震活動域	53
表 孝吉：金沢の観測資料からみた地震活動域について	61
竹園健治・坂本哲雄・表 幸治：輪島の地震記象からみた地震活動域について	69
三好 力：和歌山の観測資料から見た近畿周辺の地震活動域について	77

第 4 号

土高 茂：豊岡における地震の特性	87
弘中 清・真野幸男・清野俊雄：浜田の地震記象からみた西日本の活動域について	91
清水邦夫：鹿児島島の地震記象からみた地震活動域について	99

大籠信雄：震源分布からみた九州の地殻構造と延岡の記象	113
松島 馨：秩父の地震について	125
村山信彦：大地震によって生じた気圧微振動の観測	131
太田芳夫：濃尾地震の今昔について	145
石田泰治・加藤喜康：神津島付近の群発地震について	151
気象庁・岐阜地方気象台：昭和44年9月9日岐阜県中部地震調査報告	157

第 35 卷

第 1 号

河田可洋：ガス検知法による火山ガス分析（第1報）	1
札幌管区気象台・仙台管区気象台：1969年8月12日北海道東方沖の地震調査報告	15
山内義敬：樽前山の電磁地震計に記録された大砲の振動	37

第 2 号

田中康裕：Vulcano 式噴火活動における大爆発の起こり方について	41
沢田可洋：ガス検知法による火山ガス分析（第2報）	53
吉留道哉：桜島における有感A型地震と弱線形成について	66
雑報	
田沢堅太郎：1969年の三原山の噴火について	73

第 3, 4 号

勝又 護：日本列島およびその周辺におけるサイスミシティとそれに関連する諸問題	75
市川政治：地震モーメントと余震域・波源域	143
渡辺偉夫：1968年十勝沖地震の余震，発震機構および津波の波源	149

第 36 卷

第 1, 2 号

山岸 登：松代で観測された PL_{21} 波の解析	1
関谷 溥：関東南部の地震活動について	13
田中康裕：Magma reservoir を通る地震について	29
仙台管区気象台・秋田地方気象台・盛岡地方気象台	
1970年10月16日の秋田県南東部の地震調査報告	44
福岡管区気象台：1970年7月6日「宮崎県沖の地震」の調査報告	77
田沢堅太郎・高橋昌輝・神保功：三原山の基準測量	85

第 3, 4 号

勝又 護・徳永規一：震度IVの範囲と地震の規模および震度と加速度の対応	89
徳永規一・勝又 護：最近の顕著な地震の表（1961年～1970年）	97
松本 久：近地用のP, SおよびP～Sのノモグラムの作図法と それを利用した走時表について	109
気象庁地震課：雲仙火山付近の地震活動	119
高木 聖：雲仙火山付近の地震の初動分布の解析	137
須賀盛典：有珠山周辺に発生する地震について	143

雑報

1970年著作目録 155

第37巻

第1号

長宗留男：実体波から求められる大地震のマグニチュード 1
 渡辺偉夫：津波の波形と最大波高について 9
 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台・名瀬測候所：1970年の奄美大島付近の地震活動 25
 気象庁地震課：1971年9月6日の樺太南西岸沖の地震と津波 33

第2号

三浦照夫・湯村哲夫：北海道地方の震度特性について 39
 吉田 弘：磁気テープ記録式電磁地震計による地震のマグニチュードの決定 49
 気象庁地震課：岩手火山の基礎調査報告 55
 函館海洋気象台：渡島大島火山現地調査報告 73

第3号

勝又 護：地震動の最大加速度の推定 79
 山本雅博：1972年2月29日八丈島東方沖地震についての2, 3の考察 89
 気象庁地震課：1972(昭和47)年2月29日八丈島東方沖の地震 97
 稲垣豊秋・槌屋 清：1965年1月から1970年6月までの阿蘇山における異常現象について 103
 気象庁地震課：気象庁地震観測官署の地盤調査 113

第4号

柴田武男・竹山一郎・関 彰：地震波形の周波数分析 117
 山岸 登：松代で観測されたPL₂₂波の解析 125
 仙台管区気象台：東北地方に展開した磁気テープ記録式地震観測装置に関する諸調査(1) 135
 雑 報

1971年著作目録 167

第38巻

第1号

渡辺偉夫：津波の規模と津波発生に関係するパラメーターについて 1
 宇佐美龍夫・勝又 護：震度別有感地震回数 15
 浜田信生・勝又 護・泉 末雄・斎藤 進：新幹線による振動の調査報告 23
 気象庁地震課：1972年に日本で観測された津波 31

第2, 3号

山岸要吉・泉 末雄・山本雅博：松代地震観測所で観測された
 地下核爆発と自然地震の地震波動について 37
 岸尾政弘・望月英志：深い地震のマグニチュードを決めるための調査 47
 気象庁地震課：岩木火山の調査報告(1971) 77
 気象庁地震課：1972(昭和47)年12月4日八丈島東方沖の地震 87

第4号

山岸 登：HGLP地震計に記録された深発地震による S_cS , $sScS$ および $ScSScS$ 波の解析	103
勝又 護：“地震動の最大加速度の推定 (Vol. 37)”の訂正および追加	121
井上 健：磐梯山の火山性地震について	123
仙台管区気象台：東北地方に展開した磁気テープ記録式地震観測装置に関する諸調査	129
雑 報	
1972年著作目録	141

第39巻

第1号

田中康裕：伊豆大島三原山の御神火の発生機構について	1
天野 充：静岡県沿岸の津波	11
雑 報	
朝倉克抓：摩擦値を求める式について	25

第2, 3号

沢田可洋：地震の空間分布についての一調査 — 北海道地域	27
関谷 溥・久本壮一・望月英志・小林悦夫・栗原隆治・徳永規一・岸尾政弘： 1973年根室半島沖地震と北海道南方海域の巨大地震	33
市川政治・望月英志：1973年根室半島沖地震のメカニズムとそれに関連した2,3の問題	41
吉留道哉：桜島周辺における地震記録の異常とマグマたまりとの関連について	49
山岸 登：最近2年間におけるNOAAに対する松代の地震資料の重要度について	63

第4号

栗原幸一・宇津野忠・長宗留男：十勝岳におけるP波初動方向の偏りについて	75
関谷溥・徳永規一：遠州灘周辺のSeismicity Gapについて	83
気象庁地震課・静岡地方気象台・石廊崎測候所：1974年伊豆半島沖地震調査報告	89
雑 報	
1973年著作目録	121

第40巻

第1号

正務 章・荒川義則：近地地震観測所としての松代の潜在検知能と効率について	1
涌井仙一郎：小笠原諸島付近の表面波と地殻構造について	9
吉留道哉：桜島爆発地震の統計的調査	19

第2, 3号

山岸 登：松代における常時微動	33
市川政治：P波速度異常が震源決定に及ぼす影響とP波異常域の検知について	43
福岡管区気象台：1975(昭和50)年1月22日—23日熊本県北東部の地震の調査報告	55
気象庁地震課・仙台管区気象台・秋田地方気象台・盛岡地方気象台：秋田駒ヶ岳の 噴火終息後の表面現象(1971年10月~1975年2月)	73

第4号

福岡管区気象台：1975(昭和50)年4月21日大分県中部地震の調査報告	81
長宗留男・中礼正明：1975(昭和50)年6月10日の北海道東方沖の地震の大きさと津波の規模	105
田中康裕・古田美佐夫・斎藤進・山本博二：赤外線放射温度計による火山地熱帯の観測	109
雑報	
地震・火山および津波に関する気象庁職員著作目録(1974年)	115

第41巻

第1, 2号

渡部貢：1973年浅間山の噴火時とその前後における地震活動	1
山岸要吉・泉末雄・相原奎二：松代における地殻変動の連続観測結果について	13
涌井仙一郎：その後の松代群発地震の活動について	21
札幌管区気象台：1975年6月10日北海道東方沖の地震調査報告	31

第3, 4号

山岸登・涌井仙一郎：松代の一点観測から比較的遠い地震の 実体波マグニチュードを推定する方法	49
神林幸夫・市川政治：気象庁67型地震計記録による近地浅発地震の規模決定について	57
気象庁地震課・甲府地方気象台・横浜地方気象台： 1976(昭和51)年6月16日の山梨県東部の地震について	63
気象庁地震課：1973年～1975年に日本で観測された津波(1972年追加)	77
気象庁地震課：津波予報図の改正——津波注意報「ツナミチュウイ」の下限について——	83

第42巻

第1, 2号

柏原静雄・竹山一郎：電磁式地震計の定数測定について	1
泉末雄：松代における埋込式ひずみ計の観測について(第1報)(外気温度の影響)	11
松皮久義・勝又護：松代の表面波上下動振幅を用いてマグニチュードを決める式	19
望月英志・小林悦夫・岸尾政弘：1965年～1974年の気象庁の震源検知能力	23
田中康裕・古田美佐夫・中礼正明・浜田信生・築田俊郎：赤外線放射温度計 による火山の地熱地帯の観測(2)	31

第3, 4号

山岸登：松代で観測された長周期回折P波	41
泉末雄：松代における埋込式ひずみ計の観測について 第Ⅱ報	51
市川政治：気象庁新地震観測網の震源決定能力	55
大阪管区気象台・松江地方気象台：1977年5月2日島根県中部の地震の調査報告	61
勝又護：地震の規模と被害のおよぶ範囲	73

第 43 卷

第 1, 2 号

浜田信生：地球潮汐歪と松代地震発生の関係について	1
市川政治：気象庁における震源要素新計算法と走時表	11
気象庁地震課・石廊崎測候所・大島測候所：1978年1月14日伊豆大島近海の地震調査報告	21

第 3, 4 号

市川政治：三陸沖の地震の震源分布	59
竹村行雄・松本 久：国内データによる遠地地震の震源決定について	67
仙台管区気象台：1978年2月20日の宮城県沖地震調査報告	75
青森地方気象台・八戸測候所：1978(昭和53)年5月16日青森県東沿岸地震の調査報告	93
石廊崎測候所：1978年11月23日の伊豆半島東部の地震による被害調査報告	103
二瓶信一：1978年9月13日の小笠原・母島付近の局発地震について	107
気象庁地震課：1978年1月14日伊豆大島近海の地震調査報告(補遺)	109

第 44 卷

第 1, 2 号

長宗留男：M7クラスの地震と地体構造	1
涌井仙一郎：松代におけるP波の走時残差	7
吉田 弘・勝又 護：強震動の継続時間	13
望月英志・細居善一：電卓による現業用震源決定	19
渡部 貢：むつ湾地震(1976年11月)前後における地震波速度変化について	27
地震観測所：ASRO地震観測システムについて	31

第 3, 4 号

森 滋男：秩父地方での表面波の減衰について	41
佐藤 久：土佐清水および串本で観測された遠地津波の振動特性について	47
市川政治：地震記録自動処理装置	55
市川政治・藤沢 格・吉田 弘：震源計算装置と処理結果	75
佐々木利夫：吾妻山・安達太良山・磐梯山付近に発生した火山性地震の震源推定について	87

第 45 卷

第 1, 2 号

長宗留男：1978年伊豆大島近海地震の走時解析	1
椋皮久義・柏原静雄・浜田信生：マイクロコンピュータを地震観測に応用する試みについて	9
市川政治：震源の深さの信頼度について	29
渡部 貢：青森県西津軽海岸沖の群発地震 (昭和53(1978)年9月~昭和54(1979)年4月)について	37

第 3, 4 号

浜田信生・柏原静雄：松代における地殻変動観測に関する諸問題について	49
島村英紀・中村裕二・岩尾導徳・浦島達郎・安井 正：渡島大島火山調査報告	85

気象庁地震課：1976～1979年に日本で観測された津波	99
------------------------------	----

第46巻

市川政治・神林幸夫：P～Fによる地震規模の判定	1
気象庁地震課・三島測候所：1980年6月29日伊豆半島東方沖の地震と その前後の群発地震活動調査報告	7
気象庁地震課データ処理係：震央地域名の自動命名	33
市川政治：気象庁における地震定常調査業務の変遷	39
市川政治：L-ADESS地震端末による地震データ処理	47

第47巻

札幌管区気象台：昭和57年(1982年)浦河沖地震調査報告	1
仙台管区気象台：1981年12月2日の青森県東方沖地震調査報告	59
古屋逸夫：体積歪計の理論応答	71
市川政治：余震について2・3のこと	77
桧皮久義・佐藤 馨・二瓶信一・福留篤男・竹内 新・古屋逸夫：埋込式体積歪計の気圧補正	91
竹内 新：気象庁76型地震計によるマグニチュードの決定	112
久本壮一：桜島爆発の時間分布	117

第48巻

第1, 2号

古屋逸夫・桧皮久義：気圧変化及びレーリー波入射に対する埋込式体積歪計の応答	1
市川政治・安部徳郎：仙台管区気象台におけるL-ADESS地震端末に よる地震データの処理状況	7
二瓶信一・桧皮久義：三ヶ日における埋込式体積歪計に対する降雨の影響	18
福留篤男：埋込式体積歪計による地球潮汐の観測	23

第3, 4号

浜田信生・吉田明夫・橋本春次：気象庁震源計算プログラムの改良 (1980年伊豆半島東方沖の地震活動と松代群発地震の震源分布の再調査)	35
涌井仙一郎：気象庁とUSGSの震源要素の地域的比較及び松代の走時残差	57
久本壮一：桜島爆発の時間的分布(その2)	65
前橋地方気象台：1982年10月26日, 12月29日の草津白根山の噴火	69

第49巻

第1, 2号

気象庁地震火山部・三宅島測候所・気象研究所：昭和58年(1983年)三宅島噴火調査報告	1
大地 洸・徳本哲男・中川一郎・笹井洋一・歌田久司・石川良宣・小山 茂： 三宅島噴火に伴う地磁気全磁力変化	49
横山博文：最近の気象庁地震観測網の震源決定能力 — 1979～1983 —	53

第3, 4号

高橋道夫・吉田 弘・加藤 茂・浅田 昭・春日 茂：伊豆半島東方沖の 群発地震活動（1948年8月30日～）の水中音響観測	67
塚越利光・望月英志・平井俊一・吉川一光：ARモデルによる地震波形処理	73
山本雅博・後藤主夫・豊田正昭・永岡 修：福岡管区気象台地震波形 テレメーターシステム整備とそれに伴う地震検知能力の改善について	93
大阪管区気象台：昭和59年（1984年）5月30日兵庫県南西部の地震調査報告	105
市川政治：地震のメカニズム解の信頼度表示について	117

第50巻

第1, 2号

浜田信生：1923年関東地震の震源の深さについて	1
安久津俊幸：日本海中部地震による津波伝播の数値シミュレーション（能代付近）	7
中禮正明・下村雅直・松田健助：阿蘇山中岳第1火口湯溜り水位の測定（1980～1984）	15
佐々木亘・宮村淳一：旭川で観測されたScP相の解析	23
福岡管区気象台観測課：阿久根測候所における臨時地震観測	27
川野 浩：根室で観測された地震の地域性	33
福岡管区気象台観測課・鹿児島地方気象台：1984年4月28日 鹿児島県牧園町の地震についての被害報告	37

第3, 4号

上垣内 修：体積歪、傾斜データに対する気圧の影響の補正に関する物理的考察	41
細野 耕司・笹川 巖・徳永 規一・勝又 護：1985年5月から始まった父島北西 海域の特異な群発地震活動	51
神定 健二：SP変換波から推定した相模湾地域の地震波速度不連続面の形状	61
二瓶 信一・上垣内 修・佐藤 馨：埋込式体積歪計による観測(1) 1976～1986年の観測経過	65
地震津波監視課：1980年～1985年に日本で観測された津波	89
気象庁地震観測所：1986年8月24日長野県東部の地震調査報告	105
札幌管区気象台、岩見沢測候所、留萌測候所：昭和61年（1986年）11月13日 北空知地方の地震調査報告	119

験震時報投稿規定および投稿の手引き

験震時報は全国気象官署の職員が行った気象庁の地震業務に関連する分野の研究・調査を掲載し、原則として年4回刊行する。内容は論文・報文および雑報である。論文は新しい知見を含むもの。報文は論文と比較して調査・資料的傾向のあるもの。雑報には寄書・短報・速報・討論・著作目録・正誤表を含む。

原稿は投稿規定と投稿の手引きに従って作成する。不備な原稿、次の投稿規定に沿わぬ原稿は返却することがある。

1. 他誌に掲載したものをそのまま再投稿してはいけない。また、他誌に掲載したものの続編形式にはしない。
2. 原稿の本文は和文とする。和文は原稿用紙に読みやすく書く。アブストラクト等の英文はなるべくタイプライターを使う。
3. 表題は和文と英文で書く。
4. 著者名は漢字とローマ字で略さずに書く、所属官署名は和文で書く。
5. 論文には英文アブストラクトを付ける。英文アブストラクトは別紙に書く。
6. 図はトレーシングペーパーに墨や製図用インクではっきりと描く。また、赤・黄等の紙や方眼紙、リコピーの用紙およびボールペン・サインペン等を使わない。
7. 図表の表題・説明は論文の場合原則として英文で、その他の場合和文で書く。図の表題・説明は別紙にまとめて書く。
8. 本文の末尾における参考文献は、原則として次の形式に従って列記する。

雑誌——著者名(年):表題, 雑誌名, 巻数, 号数(省略してもよい), ページ~ページ。

単行本——著者名(年):書名, 第何版, 発行所, 総ページ pp. 数。または引用ページ。

(例)

久野 久 (1958): 大島火山の地質と岩石, 火山, 第2集, 3, 大島特別号, 1~16.

Gutenberg, B. and C. F. Richter (1942): Earthquake Magnitude, Intensity, Energy and Acceleration, Bull. Seism. Soc. Amer., 32, 163~191.

竹内 均 (1966): 地球物理学 (坪井忠二編), 第1報,

岩波書店, 67~71.

Jeffreys, H. (1959): The Earth, 4th ed., Cambridge Univ. Press, 108~113.

9. 著者には別刷50部を無料で送付する。

10. 原稿送付先は気象庁地震予知情報課
原稿を作成するときは、次の投稿の手引きの各項の趣旨に沿うこと。また、原稿提出前には以下の各項に沿って必ず原稿を点検する。

1. 本文

- 1.1 編集・印刷の便宜上400字詰の原稿用紙を使う。
- 1.2 図表用のスペースを本文にあけておかない。
- 1.3 数式は2行取りに書き、数式の文書・記号をはっきりと説明する。
- 1.4 誤まりやすい英字・ギリシャ文字・ベクトル記号にはフリガナを付け、大文字・小文字の別を示す。添え字は判別出来るようはっきり書く。
- 1.5 暦年には原則として西暦を用いる。
- 1.6 人名の敬称は原則として省略する。

2. 表題・アブストラクト・はしがき

- 2.1 表題は具体的に内容をよく伝えるものであること。
- 2.2 英文の目的・仮定・方法・結論等を明確に書き、次の諸点を留意する。①表題をそのまま使って第1行を書き始めない。②図・表・式・文献の番号を引用しない。③第三者の立場で書き、IやWeを用いない。
- 2.3 はしがきには、本文の目的・方法・意義・他の研究との関連等を書く。

3. 図表

- 3.1 図表の数は最小限にとどめる。
- 3.2 図表のそう入箇所を本文の欄外に記入する。
- 3.3 図表中の文字・記号等をもれなく説明する。また、必要な単位は必ず付ける。
- 3.4 製版後、図の修正は不可能だから注意する。
- 3.5 原図の大きさは印刷時の2~3倍(線拡大率)くらいがよい。図に記入される英字・数字は印刷時の大きさが1mm、漢字の場合は1.5mm以下にならぬようにする。

昭和62年3月31日発行

編集兼発行人 気 象 庁
東京都千代田区大手町1-3-4

印刷所 株式会社 双 文 社
東京都文京区本郷1-14-8